

研究課題	肢体不自由のある児童・生徒における映像制作や創作活動による表現力の育成
副題	
キーワード	映像制作 肢体不自由 アクセシビリティ
学校/団体名	筑波大学附属桐が丘特別支援学校
所在地	〒173-0037 東京都板橋区小茂根 2-1-12
ホームページ	<a href="https://www.kiri-s.tsukuba.ac.jp/">https://www.kiri-s.tsukuba.ac.jp/</a>

## 1. 研究の背景

肢体不自由のある児童・生徒は上肢の操作性の困難により、書字などの難しさだけでなく、視覚認知の難しさなど様々な学習上の困難を抱えている。当校ではこれまでタブレット端末などの ICT 機器を活用することでこれらの困難を軽減し児童・生徒が主体的に学習を行うことのできる環境の構築などについての研究及び教育実践に取り組んできた。

また、肢体不自由のある児童・生徒はその障害特性や経験不足から伝えたいことの因果関係を捉えたり、構成を考えて整理したりすることが難しいため、国語の作文や数学の証明などを苦手とすることが多い。しかしながら、当校の児童・生徒は ICT 機器を利用することにより、構成作業を補い、情報整理に役立てるなどしている。そのような利用から波及しタブレットやビデオカメラなどを利用して物語の創作や映像制作などに興味を持つようになった児童・生徒が見られるようになり、課外活動としてこのような活動に取り組みたいというニーズも高まりつつある。

そこで、物語の創作や映像制作などの表現活動を行うことで、自分たちの伝えたいことを整理する力をつけることが出来ると考えた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、肢体不自由のある児童・生徒の教育活動において、表現手段として映像作成を行うことで、以下のような効果があることを明らかにするとともに、そのための有効な指導法や ICT 機器の利用法について検討することを目的とした。

- (1) 表現手段として映像作成を行うことで、自分自身の中にある他の人に伝えたいという意欲を高めることが出来る。
- (2) 映像作成を通して、受け取る側の立場にたち、伝わりやすい表現の工夫を考え表現力を高める事ができる。
- (3) 映像を制作することで、学習した内容を効果的にふり返り整理することが出来る

## 3. 研究の経過

これまでも継続して行っている、「障害のある生徒への ICT 機器の活用」の学習会の中で、映像制作のワークショップを行った。ここでは撮影や編集の方法や表現の仕方について学んだり

意見交換を行ったりを生徒と教員が一緒に行った。



図 1 学習会の様子

また、当校では授業などで、プレゼンテーションなどの発表する場面が設定されているので、安価なアクションカメラを購入し、生徒や教員に配布し普段からで気になったこと等で利用し編集して発表などで活用できるようにした。



図 2 車いすに取り付けたアクションカメラ

配布したカメラを使用して、自分の日頃の気になったことを撮影して発表したり、学習での動画の活用を行ったりするようにした。

また、年度の終わりには 1 年間で学んだことや自分が成長したことを動画でまとめるという課題を提示した。

#### 4. 代表的な実践

##### (1) 郷土を紹介する

夏休み中の両親の実家に帰省したときに、秋田の竿灯祭りや実家の果樹園などを撮影し、編集しまとめた。

制作した動画は、道徳の単元「郷土の魅力にふれて」で秋田県についてまとめてクラスメイトにプレゼンテーションを行ったときに活用した。

竿灯祭りは、単元「郷土の魅力にふれて」の教科書の文章でも登場人物が郷土の自慢として紹介されている。他の生徒は、実際に竿灯が目の前で倒れる臨場感のある映像を見ることで、教科書の登場人物やプレゼンテーションをした生徒が秋田の郷土の自慢として竿灯祭りを紹介する理由を実感していた。



図 3 生徒の撮影した竿灯祭り

実家の果樹園の映像は、以前にお裾分けでこの生徒から実家から送られてきたりんごを貰ったことがある生徒も多く、「あのとき食べたりんごはここでとれたのか」と感心してみていた。また、「りんごと言えば青森を連想するが秋田でもりんごが育てられているんだ、」などの感想もあがっていた。車いすを利用している生徒がほとんどの学級なので、実際にりんごなどが樹になっているのを見たことがない生徒も多かったので、果樹園の映像はとても新鮮な体験となっていた。



図 4 果樹園の映像

(2) 旅行先のバリアフリーを解説する

夏休みに上海に行った際に車いすに取り付けたアクションカメラで上海の地下鉄の様子を撮影して編集し学校で紹介した。エレベータの設置状況，ホームと電車の上にスロープを置かなくても電車に乗れたこと，おおきな駅でも改札などがなくそのままホームに行ける仕組みになっていたなど。日本の地下鉄との違いを比較して、国によってバリアフリー状況がかなり違うことが実感できる動画を作成した。



図 5 上海地下鉄のバリアフリー

### (3) 映像コンテストへの出品

パナソニック主催の KWN 日本コンテスト 2019(生徒による映像コンテスト)への応募作品の制作を行った。

中高生の男子生徒が中心のグループと中学生の女子が中心となった 2 つのグループでわかれた。そしてそれぞれ高校生部門、中学生部門に作品を応募することになった。

高校生部門へ応募したグループは、自分たちも取り組んでいる、障害者スポーツのボッチャを通じた友情について、作品を制作することになった。

中学生部門に応募したグループは、障害が重度な生徒が多かった。そのため、生徒たちは 1 人での外出経験もほとんどなかった。なので、生徒たちからは、自分たちも他の中学生のように、ちょっとコンビニに寄りみちをしてみたいが、様々な制約から親や先生抜きで外出することがままならない、という想いをドキュメンタリーとして作品にすることにした。

それぞれのグループも自分たちの伝えたいことを見る人の視点に立ち、どの様に表現したらうまく伝わるか、検討を重ね構成を考え、撮影、編集を行い。制作していった。

制作する中で、自分たちの伝えたいことを短い時間で映像にまとめることの難しさを感じながらも、工夫しながら映像制作を行うことができた。

とくに中学生部門に応募した作品は、最優秀作品賞、ベストドキュメンタリー賞を受賞し、2020 年の夏に開催予定の「KWN グローバルイベント」の日本からの参加校として選ばれた。



図 6 撮影の様子

## 5. 研究の成果

自分のイメージしたことが言葉を尽くしてもなかなか伝わらないことが、映像を利用することで相手と共有できた体験を基に映像表現の素晴らしさを実感できた。

また、見る人の視点に立って映像制作を行うことで、どの様に表現した相手に伝えたいことが伝わるかを考える事ができた。

このように表現の仕方や構成を考えて映像制作を行うことで、生徒たちの構成を考える力が向上したのではないかと考えられる。

## 6. 今後の課題・展望

今回は、2月から3月にかけての感染症予防のために、授業のなかでの制限や臨時休校があり、年度末に予定していた、1年間の学習のまとめや自分の1年間で成長しことを映像でまとめるという活動を最後まで行うことができなかった。

映像制作が学びの質の向上におおきな役割を果たすことが出来るということを検証していくために来年度以降改めて行っていきたい。

## 7. おわりに

今回さまざまな映像制作に生徒と一緒に取り組むことで、生徒の構成を考え力の成長を感じるとともに生徒たちの能力の可能性に大きさに驚きも感じました。

今後もさまざまな活動で生徒の可能性を拡げていけたらと思います。